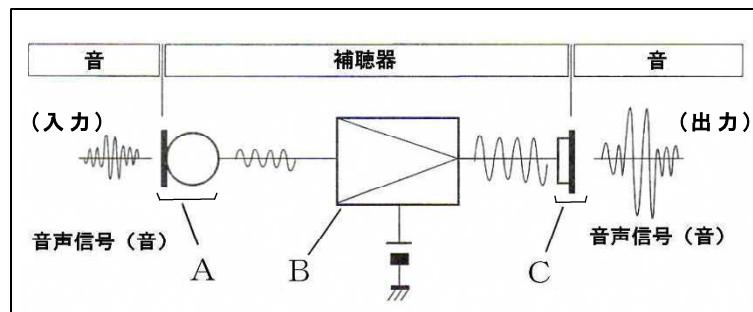


## 特別支援聴覚 専門問題例

**例 1** 次の図は一般的な補聴器の基本構造を表したものである。この図について、(1)・(2)の問い合わせに答えなさい。



- (1) 図中のA～Cは何か、その名称を書きなさい。
- (2) A～Cそれぞれの働きを示す文をア～オから選び、記号で答えなさい。
  - ア 電気信号を十分な大きさの電気信号に増幅する。
  - イ 電気信号を音声信号（音）に変換する。
  - ウ 電気信号をFM電波に変更して発信する。
  - エ 増幅器にエネルギーを供給する。
  - オ 音（音声信号）を電気信号に変換する。

(令和元年度)

**例 2** 図Aは、各種難聴と障害部位を表したものである。また、図Bは、難聴を表すオージオグラムである。図A・図Bについて、(1)～(3)の問い合わせに答えなさい。

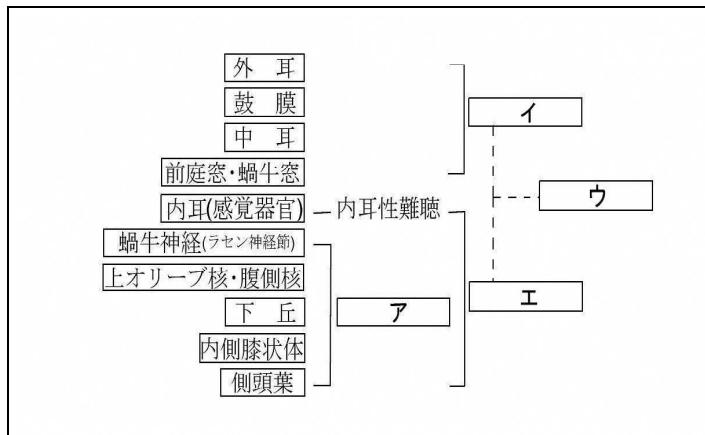


図 A

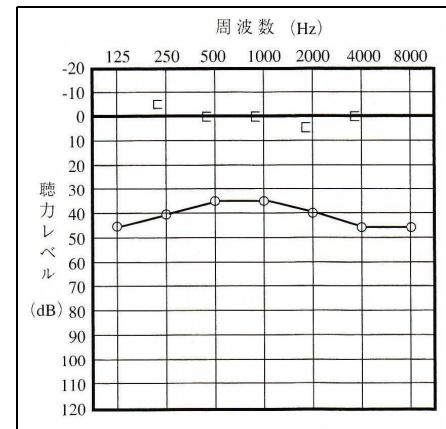


図 B

- (1) 図中ア～エにあてはまる難聴の種類を書きなさい。
- (2) 図Bのオージオグラムは、図A中のア～エのどの難聴を表しているか、記号で答えなさい。また、その根拠を簡潔に述べなさい。
- (3) 図Bのオージオグラムを示す難聴の原因となる病名を2つ書きなさい。ただし、図A中の障害部位1つにつき、病名1つとする。

(令和元年度)

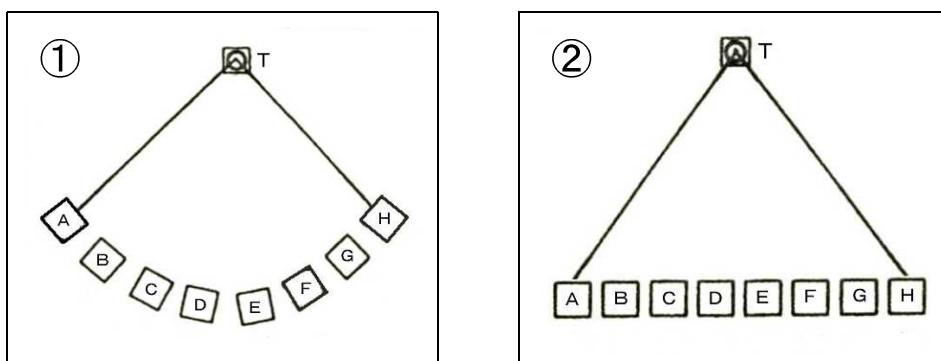
**例 3** 聴覚障がい教育に携わった、(1)～(6)にあてはまる人物について、それぞれ名前を答えなさい。ただし、日本人については、姓名とも答えること。

- (1) アメリカのカリフォルニア州においてサンタ・アナ学区の聴覚障がい児教育を任せられ、「トータルコミュニケーション」という聴覚障がい児教育の理念を提唱した。
- (2) 日本最初の聾学校である「京都盲唖院」の創設に携わった。明治15年に、京都府盲唖院院長となった。
- (3) 日本聾話学校を創設し、アメリカの聾学校に倣った口話教育を始めた。
- (4) 聴覚障がいのある娘(はま子)のために、独学で口話法を学び指導した。後に滋賀県立聾話学校の校長に就任した。
- (5) 18世紀後半フランスのパリに聾学校を設立した。手話と書き言葉とを結びつける手話法を主張した。
- (6) 視覚障がい教育において日本点字を考案し、また聴覚障がい教育においては「尋常科ニ関スル[唖]生ノ希望」を表して、聴覚障がい教育に当たる教員の心構えを示唆した。

(令和2年度)

**例 4** 単語「新聞紙（しんぶんし）」の発音指導について、(1)・(2)の問い合わせに答えなさい。

- (1) 語頭の「し」と語尾の「し」の発音指導上の違いは何か、簡潔に述べなさい。
- (2) 語中に撥音「ん」が2つある。前にある「ん」をA、後にある「ん」をBとしたとき、同じ発音要領の語句をA・Bそれぞれ3つ書きなさい。なお、指示された撥音は、下線で示しなさい。



(令和2年度)

**例 5** 補聴援助システムについて、(1)・(2)の問い合わせに答えなさい。

- (1) 補聴援助システムを活用する利点を2つ答えなさい。
- (2) 教室等で使用されている主な補聴援助システムとして、磁気誘導ループシステム、赤外線補聴システム、デジタル補聴システムがある。この3つのシステムそれぞれについて、他の2つのシステムと異なる長所を1つずつ答えなさい。

(令和3年度)

**例 6** 特別支援学校「小学部・中学部学習指導要領」について、(1)・(2)の問い合わせに答えなさい。

(1) 次は、「第 7 章 自立活動」「第 3 個別の指導計画の作成と内容の取扱い」の一部である。(①)～(⑤)にあてはまる語句を答えなさい。

2 個別の指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 個々の児童又は生徒について、障害の状態、発達や(①)の程度、興味・関心、(②)や学習環境などの実態を的確に把握すること。

(2) 児童又は生徒の実態把握に基づいて得られた指導すべき課題相互の(③)を検討すること。その際、これまでの学習状況や将来の(④)を見通しながら、長期的及び短期的な観点から指導目標を設定し、それらを達成するために必要な指導内容を(⑤)に取り上げること。

(2) 下線部によって収集した児童生徒の長所やよさ、課題等について、どのような観点で実態把握を整理していくか。観点を 3 つ答えなさい。

(令和 3 年度)

## 特別支援聴覚 正答例

問題番号		正 答 例																	
<b>例 1</b>	(1)	A	マイク	B	増幅器(アンプ)	C	イヤホン												
	(2)	A	オ	B	ア	C	イ												
<b>例 2</b>	(1)	ア	後述路性難聴		イ	伝音難聴													
		ウ	混合性難聴		エ	感音難聴													
<b>例 2</b>	(2)	記号	イ																
		根拠	気導聴力の聴力レベルが40dB程度の障がいを示しているのに対し、骨導聴力は正常なレベルにある。このことで内耳以降に障がいがないことが示されているため。																
<b>例 3</b>	(3)	耳垢栓塞		急性鼓膜炎															
	(4)	ロイ・ホルコム		(2)	古河太四郎														
<b>例 4</b>	(5)	A. K. ライシャワー		(4)	西川吉之助														
	(6)	ト・レヘ		(6)	石川倉次														
<b>例 4</b>	(1)	語頭の「し」は、後続母音の/i/音を発声するが、語尾の「し」は後続母音/i/音を無声化される。																	
	(2)	A	さんま	とんぼ	コンピ														
<b>例 5</b>	B	ほん	さんすう	かん															
	(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>周囲の騒音に影響されずに、音や音声を聞き取ることができる。</li> <li>距離が離れていても、音や音声を聞き取ることができる。</li> </ul>																	
<b>例 5</b>	(2)	磁気誘導 ループ	TまたはMTのスイッチが付いていれば、使っている補聴器や人工内耳がそのまま活用できる。																
	(3)	赤外線 補聴	信号が安定している。																
<b>例 6</b>	(4)	デジタル 補聴	大がかりな機器の設置や調整が不要で、音質が良く混信も少ない。																
	(5)	<table border="1"> <tr> <td>①</td><td>経験</td><td>②</td><td>生活</td><td></td></tr> <tr> <td>③</td><td>関連</td><td>④</td><td>可能性</td><td></td></tr> <tr> <td>⑤</td><td>段階的</td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>				①	経験	②	生活		③	関連	④	可能性		⑤	段階的		
①	経験	②	生活																
③	関連	④	可能性																
⑤	段階的																		
<b>例 6</b>	(6)	自立活動の区分に即して整理																	
	(7)	学習上又は生活上の困難の視点で整理																	
<b>例 6</b>	(8)	生活年齢や学校で学ぶことのできる残りの年数を視野に入れた整理																	